

子供の興味を持続させる学習方法が最適

エデュケーションリンク 美貴枝・ステイプルトン先生

家庭内での会話というものは、「起きて」、「ごはん食べて」、「行ってっしょい」など、一連の言葉の繰り返しに終止していることが多く、そこで使われる語彙の数も限られている。たとえ、家庭内での日常会話を日本語で行っていたとしても、一人の人間から発せられる言葉や表現法は単一的なものであり、また大抵同じ友人と遊ぶために限られた言葉しか使わなくなる。ましてテレ

も、「お日様が当たるとこれはこんな色に見えるね」というような生活体験のほうがずっと貴重と、先生は強調する。

幼児

先生からのアドバイス

California



生活体験の中で自ら発見したことを言葉で表現

ピやラジオ、外界から入ってくる情報は英語という環境にあるために、日本語の語彙はどうしても乏しくなってしまうという現実がここにある。「それが明らかになるのが、早い子供で4歳から4歳半、通常は5歳くらい」とステイプルトン先生は指摘する。一時帰国して周囲の子供達の言語の発達と自分の子供を比べて、愕然とするケースが多いという。

それではそうならないためにはどうすればよいのか？ まず大切なのは、外国で育てば入ってくる日本語の情報も少なくなるという当然の事実をまず親が再認識すること。そして家庭で日本語の情報を浴びせるように子供に与えることだ。「同じことをいうのでも、違う表現の仕方をしてみたりするのです」と先生は語る。日本で育っている子供でも、同じ環境の中で、同じ大人と毎日変化のない生活をしていたら、言葉はそれほど育たないという。

言葉は強制されて覚えるものではなく、生活体験から学ぶもの。それゆえ、生活体験を豊かにすることが、言葉の成長の上で大変重要な役割を果たす。「郊外へ行く、散歩をする、など自然に触れる機会をできるだけ増やし、子供達の発見を促すことです」。自然の変化を楽しみ、それを言葉にすることが言葉の成長に大きく貢献すると先生は説明する。生活体験の豊かな子供は、「こう



してみようかな」、「こうだったのにこうなった」といった言葉を頻繁に発するという。「それに先生達が、前は喚いていたのに、今日はしぼんじゃたね、などの言葉の補足を行います」。カードで、これが「赤」、これが「あ」と教えるより

点の数を数えたり、ランダムに点を打ってそれをつないでみるなど、子供の興味をそそる方法をとります。そうすることで、学習することが苦痛でない子供を育てているのだ。「自分で発見して学んだものは忘れにくいものです」と先生。

絵本の選び方に悩むお母さん達もいるようだが、まず大切なのは、子供が読んでほしいと要求した時に読んであげること。シンプルな本から少し難しいものまで、様々な種類の本を読んであげるとよい。「同じ本ばかりを聞かせる子供もいるが、それでもいいので読んであげてください」という。同じ本でも時には感情を込めて、時にはあっさりとして、表現を変えて読むのもよい方法だ。

本は生活体験があるから味わえるものだ。だから魚に興味のある子なら、魚の絵本を買ってあげよう。それを基に親と子供が、「この魚の名前は?」「ピカソだよ」「ピカソの絵みたいだからかな?」「ピカソって誰?」「絵を書く人よ」などと会話を広げていく。そして絵本の場面を使って子供が自分で想像した登場人物を加えて遊ぶようになる。そこまでののが絵本の本当の楽しみ方と先生はいう。

現在のアメリカやヨーロッパの絵本は、日常生活を基本としてもが多い。日本の昔話やイソップ物語のように「戒め」や「罰」を主体としたものより、安心して子供に聞かせることができると、先生は考えている。「英語だからといって引っ込み思案にならず、

また、こどもの興味を持続させる方法を探すことも大切。子供に文字を覚えさせるのではなく、点線をなぞって文字を作るなど、遊びの中から文字の学習につながる方法をとる。「なぞるだけでなく、

DATA

〈所在地〉 7 Encanto Dr,
Rolling Hills Estates, CA
90274 〈TEL〉 (310)325-
8536 〈校長名〉 美貴枝・ステ
イプルトン (Mikie Sptapleton)
〈学年〉 2歳3ヶ月～ Pre K
〈授業料〉 入学金: \$300、週
5日\$480、週3日\$380、週
2日\$300 〈総生徒数〉 11人
〈転入学に必要な手続き〉 入園
申込書、面接

子供の興味を持続させる学習方法が最適

へたな英語でもよいので読んであげることです。英語の絵本を、日本語に変えて話して聞かせてあげるというのもよい方法だが、たとえなまりのある英語での読み聞かせでも、言葉にはいろいろな表現法があるのだということの子供に分らせるよい機会になるのである。イギリス人の夫を持つステイブトン先生には3歳になる男の子がいるが、お父さんにはイギリス英語、アメリカ人の友人にはアメリカ英語、お母さんには日本語とうまく使い分けしているという。

また、アメリカの幼児用学習ブック（Child Bookなど）には、「ライオンは1日にどれだけ走る」、「キリンは1日何時間食べている」など、動物の性質が子供にきちんと伝わるような情報が記されているのに対して、日本では「猫がかわいもり」、「蝶々が飛んでいる」といった描写だけのチャイルドブックが多い。これでは子供の想像力を伸ばしてあげることが難しくなるという。

親は自分の子供の日本語のレベルが標準に達しているのか常に気になるものだ。一般的には、2歳検診時では自分の感情を何となく話せるようになっていて、そして3歳では「主語」＋「動詞」＋「その他」という表現ができるのがほぼ標準レベルと考えられている。しかし先生は、「男の子と女の子ではその言語成長速度が違います。また、生活体験が豊かな子でも、言葉が出るのが遅い子もいるのです」と指摘する。言葉の多い少ないだけで、子供の言語能力を決めてしまわないことが大切だ。「言葉が出ない子でも、体験を自分の目で見ているか、思考しているか、その幼児の表情を注意して見てあげることが肝心です」と先生は説明する。もし、その子供がきちんと思考しているようなら、次はそれを遊びに生かしているかどうかを確認する。そこで言葉をかけ、徐々にその子から言葉を引き出してやるという方法をとる。

言葉の発達がいくら環境や性格によって異なるとはいえ、遅れを指摘されれば、両親はその事実を認識する必要がある。特に、2ヶ国語以上の言語で育てている場合は、それぞれの言語の発達がどうなっているかを確認すべき。その時に注意したいのは、1機関の判断に任せないこと。多くの人からの意見を参考に、子供の能力を判断したい。多言語環境におかれた子供は、どうしても発音しやすい言葉を先に学んでしまう。例えば「Apple」と「りんご」とくれば、「Apple」を先に吸収するだろう。「Train」と「汽車ポッポ」なら「汽車ポッポ」をとるかもしれない。ここで重要なのは、次段階においてこの「Apple」と「りんご」、「Train」と「汽車ポッポ」が同じものであることを認識できるかどうか。この2つの単語が結び合わない子供は、言語能力よりも思考

回路に何かしらの支障があると考えたほうがよいだろう。「こうした場合は、一つの言語で育ててあげる必要性が出てきますね」と、先生は説明する。

成長過程において、片方の言語が強くなったり弱くなったり、その比率が片寄ることがよくある。これは2言語以上の環境下で育つ子供には起こりがちな現象で、これを皆無にする手立てはない。「むしろそのことで、親が迷ったり、時間的余裕を持ってないことが一番問題です」と先生。「英語が強くなってきた時期は、心配しないで英語力をどんどん伸ばしてあげてください」と先生はアドバイス



する。そうした時期に無理矢理日本語に戻そうとすれば、英語の伸び自体も遅らせてしまうという結果を招きかねない。英語力がつけていけば、日本語環境が変わった場合も、その英語力を軸として日本語力を伸ばしていけると先生は語っている。

しかし問題となるのは、日本における受験というものが、そうそうまい具合に、日本語力が優勢になっている時期に来てくれないことだ。この場合は、多少荒治療になるが、日本に帰るか、日本語しかない環境の中に入れることが一番即効力がある。そのため、親としてはそうした時期も予定に入れながら、子供をおく環境を考えてやる必要がある。

英語、日本語の両語をポジティブな姿勢で学んでいっている子供の中には、英語環境で育ってはいるが、夏休みを利用して毎年日本に帰る子供達がいる。そうすることで、日本に住む友人ができ、日本語を話すことが楽しくなる。それが学習意欲につながるわけだ。「親にできるのは、強制することではなく、日本語の必要環境を与えて上げること」と、先生は強調する。

最後に先生は、家庭から出て初めての集団生活である保育園・幼稚園という存在が、言語の発達にいかにか重要な役割を果たしているか語ってくれた。過去に日本で起こったことだが、海外生活から日本に戻った子供が「大根の色は黒」といって、先生に叱られた。その子は異国にある黒い大根を実際に自分の目で見てきたのだ。異文化を体験する子供達が増える中、教師がまず大きな世界間を身に着けて教育に当たらなければならないのだと、ステイブトン先生は締めくくった。